

夢の残照 特別興行編 改め、

『夕暮れクリスタルスターライト』
Vol.4水月晶みづきあきら & 星野美樹ほしのみき

■ オープニング

みき 「さああって！ 晶と美樹の『夕暮れクリスタルスターライト』！ 古びた座布団を新しくして華麗に再登場ですよ〜！」

あきら 「ちよつ、ちよつと待ちなさい！ なんでいきなりタイトル変わっているのよ?！」

みき 「作者さんが飽きたから」

あきら 「あ、あんのぼか〜!!!」

みき 「……というのは冗談だけど」

あきら 「……美樹……」

みき 「や、ヤマンバみたいな目で睨まないでよ。実はこれ以降『夢の残照』に拘こだわるつもりがないから、純粋に新しいコーナーとして独立させたからなんだよ」

あきら 「それで微妙にラジオ番組みたいなタイトルになっているわけね…… センスは絶望的だけ」

みき 「晶は一言多いよ。それでも真剣に十分で考えたタイトルなんだから」

あきら 「……前後の言葉が互いを打ち消している気がするのよはあたしだけかしらね……」

みき 「気にしない、気にしない。わたしと晶で『スター』と『クリスタル』なんだから」

あきら 「……まあ、良いわ……で、ということは、例えば天変地異が起きてもあり得そうもないけど『夢の残照』が終わったとしても、あたしたちにはここに出ると……?」

みき 「……晶の台詞は言葉の端々から悪意があふれているよねえ〜。ともかく、どこのつまりそういうことだね」

あきら 「別の作品ならそちらの登場人物を出せばいいのに……」

みき 「今、作者さんが取りかかっている作品に出てくるキャラって、あんまりこの手の番組には合わないキャラが多いらしいからね」

あきら 「それであたしたちを続投させよう……?」

みき 「うん」

あきら 「まあ、永続的に出番があるということは喜ぶべきところなんでしょうけど……」

みき 「そうだよ〜 今の世の中、途切れたら一瞬で忘れ去られてしまうんだから〜」

あきら 「世知辛い世の中ね……」

みき 「それだけ世の中の動きが速いってこと何だろうけどね。まあ、その前に表現すら規制されるような世の中だから次が無いかも知れないけどね」

あきら 「ああ……アレね……」

みき 「そう、アレ」

あきら 「何であんな法律作るんだか理解できないんだけど……」

みき 「色々理由はあるだろうけど、どの世の為政者は言論を封殺したいという考えを持つことが多いからね〜 今回の件はその前哨戦に過ぎないのだろうけど」

あきら 「作者もあの条文ぎつと読んだらしいけど『お前らは愚かだから俺の言うことに従え』って言っているのも同然の内容って言っていたわね」

みき 「民から考える力を奪えば、国を好き勝手にどうとでもできるからねえ〜 そうなると今以上に格差は広がるだろうから、治安も悪化するけど、格差の上の人には関係ないってことなんだろうね〜」

あきら 「……酷い話よね……」

みき 「『ゆとり教育』なんて大規模な人体実験するような国だもの、何をしてもおかしくないでしょう?」

あきら 「そういう捉え方もあるわね……作者も『文化は国を構成するものであり、表現は文化なのだから、それを削り続けたら国そのものの存在意義すら無くなる』って言っていたわね。だいたい思想の多様性が失われるのは生態系の多様性が失われると同義なんだから脆弱になるのもあたりまえだし」

みき 「この国の政治屋さんにそこまでの考え方を持っている人がどれだけいることやら……だね。ま、そんな暗い話はとりあえず置いておいて、次の話題に行ってみましょう〜」

■ 水戸コミケ報告

あきら 「三月に『コミケツとスペシャル5 水戸』に参加してきたわよね?」

みき 「そうそう、二日前に下見に行ったり、初日は自宅で作業だったけどTwitterで大荒れの天候による交通障害の阿鼻叫喚の模様を横目で眺めていたみたいだね」

あきら 「……悪趣味な……でも町おこしとはいえ、関東圏内だから『旅人のザック』としては行きやすかったけどね」

みき 「電車でも一本だし、車でも高速道路ですぐだったしね」

あきら 「水戸コミケでは、ジャンルをFCにして初の二次創作サークルとして参加していたけど、新刊はオリジナル小説とか……」

みき 「うん、リニューアル版だけ残照第一話を新刊として出してたね」

あきら 「サークル始まって以来の珍事、文芸系にも関わらず相当本が出ていったって喜んでいただけ……」

みき 「Emergencyは実質上の完売、無料配布だったけど第一話も全部はけちっちゃたし……ま

あ、正直な話、Hiroshiさんの絵に惹かれていた人が多数だったばいけどね〜」

あきら 「世知辛いわね……当然と言えば当然だけど……」

みき 「なにせ、スケブまで頼まれちゃったからねえ〜 そのときはHiroshiさんが不在だったので断っちゃったけど、今回のコミティアから受け付けることにしたし」

あきら 「なんにせよ、Hiroshiさんも忙しい人だからあんまり負担をかけないようにしないとね」

みき 「この不況下で本業が忙しいのだから良いことなんだろうけどねえ〜」

■ 近況

あきら 「だから作者の近況なんて誰が知りたいのよ……」

みき 「いや、以前からのお約束だから」

あきら 「それで？ あの作者は今回早々に第二話のリニューアル版を出すのを諦めていたみたいだけど？」

みき 「水戸コミケが終わった後、すぐに作業には取りかかっている、なんとか半分くらいまでは進めたけど四月に入って本業が燃え上がったからね……」

あきら 「それでも壁紙作ったりする余裕はあるみたいだけど……？」

みき 「それはそれ、これはこれ。まあ、感覚で出来る作業とフルパワーで回転させる頭脳労働では質が違うというところで一つよろしく、とのことですよ」

あきら 「そもそも、第一話に引き続いてリニューアル状態になっているのはどうなのかしらね……」

みき 「Hiroshiさんに途中経過を送ったときに『前書きが変わっているんだけど……』って突っ込まれていたしね」

あきら 「前書きは完全に置き換えたらしいから……ホント、当初の『そのまま』の予定はどこに行つたのかしらね……」

みき 「せっかくリニューアルするんだから、以前より良くしたいというのはあるんじゃないのかなあ〜」

あきら 「まあ、やる気があるだけマシとは言えるけどね……新作のプロット作業もやっていてみたいだから……」

みき 「残照の続きも書いてほしいけど、新装版が出せないことにはね〜……」

あきら 「ところで、新作ってどんな感じの話なのよ？」

みき 「あんまり話すとネタバレになるし、確定事項じゃないことも多いから断片的に……タイトルは『熾恋』」

あきら 「……もしかして、恋愛物じゃないでしょうね……あの作者が書けるわけじゃないと思うけど……」

みき 「速攻全否定とか……。恋愛物的な表現はあるけど、純粹にそれだけじゃないのでご安心を。なお、次回も主人公は女性キャラの予定です」

あきら 「どんな子なのかしら？」

みき 「作者さんのパソコンから無断で抜き取ってきた設定集のファイルによると、黒髪ロングのストレートの長身、目つきは少し悪い感じ……って書いてあるよ」

あきら 「……今、さらっと何かとんでもない台詞を流さなかった……？」

みき 「気のせい、気のせい。作者さんが出かけている時を狙って、総当たり攻撃とかしていな……」

SE 打撃音

みき 「めきよ!？」

あきら 「ご、ごほん! た、ただいま放送された内容に不適當な表現がありましたことを心からお詫び申し上げます」

みき 「……は、鼻が曲がるかと……お、おもった……」

あきら 「あなたの発言は毎回毎回いつも本当に危険なのよ! 少しは自重なさい!」

みき 「は、はあ〜い……そこまで強調しなくてもいいと思うんだけど……。気を取り直して……この主人公の女の子の見た目だけ性格は少し暗いみたい」

あきら 「それだと根暗みたいに聞こえるじゃないの。影があるとしても言いなさいよ」

みき 「とにかく、晶とはまるで違うことは確かだよね」

あきら 「……なによ、その含みのある言い方は……？」

みき 「ほらこれ」

あきら 「……なにに……『プロポーションはかなり良く、長身であることも相まって体型だけならモデルにすら通用する』……ほうほう……で、何が言いたい美樹？」

みき 「すべて」

SE 衝撃音

あきら 「え〜、パーソナリティーである星野美樹は急病のため、現時点より出演中止となりまして。大変申し訳ありません」

みき 「ご、今回は……に、二度も……」

あきら 「美樹の声が聞こえています、これは録音ですので気にせず進めましょう」

みき 「晶酷い……強引に続けるけど、ジャンルのには普通の学園物。あと神様とか精霊さんとか妖精さんとか財閥の後継者とか出てくるけど普通の学園物」

あきら 「その一体どこが普通なのよ! どこがっ!」

みき 「録音に突っ込み入れちゃ駄目だよ、晶」

あきら 「……くっ、ま、まあいいわ……美樹、そのまま続けなさい」

PS.

あきら 「そもそも論として……」

みぎ 「……うー？」

あきら 「この番組、ちゃんと聞いている人いるんでしょうね……？」

みぎ 「なあ……？」

あきら 「……おこ」

文責・風野旅人(tabito@din.or.jp)

旅人のザック(<http://www.din.or.jp/~tabito/>)

※このペーパーは新バージョンの威沙にて作成しました。